

◇国語課題◇

課題1～課題5に取り組み、課題2～課題5については、後の【解答解説】を参照し、赤ペンで自己採点（丸つけ）をした上で、間違えた問題については添削をし、高校入学後に備えて、関連分野の復習をしておきましょう。

課題1

- (1) 高校入学前のこの時期にふさわしいと思われる本を2冊以上読みましょう。ジャンル・長短は問いませんが、この課題は、本・書籍限定とし、マンガ・動画等は対象外とします。
- (2) (1)で読んだ本から1冊を選び、【要約・書評・推薦文・紹介文】のうちいずれかの形式で、四百字詰め原稿用紙に六百字以上八百字以内で記述してください。

課題2

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

単調で荒涼な砂漠の国には一神教が生まれると言った人があった。日本のような多彩にして「変幻」きわまりなき自然をもつ国で八百万の神々が生まれ崇拜され続けて来たのは当然のことであろう。山も川も木も一つ一つが神であり人でもあるのである。それをあがめそれに従うことよってのみ生命が保証されるからである。また一方地形の影響で住民の定住性土着性が決定された結果は至るところの集落に鎮守の社を建てさせた。これも日本の特色である。

仏教が遠い土地から移植されてそれが土着し発育し持続したのはやはりその教義の含有するいろいろの因子が日本の風土に適應したためでなければならぬ。思うに仏教の根底にある無常観が、日本人のおのずから自然観と相調和するところのあるのもその一つの因子ではないかと思うのである。鴨長明の方丈記を引用するまでもなく地震や風水の災禍の頻繁でしかも全く予測し難い国土に住むものにとっては天然の無常は遠い遠い祖先からの遺傳的記憶となって五臓六腑にしみ渡っているからである。

日本において科学の發達がおくれた理由はいろいろあるであろうが、一つにはやはり日本人の以上述べたような自然観の特異性に連関しているのではないかと思われる。雨のない砂漠の国では天文学は發達しやすいが多雨の国ではそれが妨げられたということも考えられる。前にも述べたように自然の恵みが乏しい代わりに自然の暴威のゆるやかな国では自然を制御しようとする欲望が起りやすいということも考えられる。全く予測し難い地震台風に鞭打たれつづけている日本人はそれら現象の原因を探究するよりも、それらの災害を軽減し回避する具体的方策の研究にその知恵を傾けたものように思われる。X 日本の自然は西洋流の分析的科学の生まれるためにはあまりに多彩でありあまりに無常であったかもしれないのである。

(寺田寅彦『日本人の自然観』による)

問1 傍線部1「変幻」と同じ内容を表す言葉を本文から漢字二字で抜き出せ。()

問2 傍線部2「これも日本の特色である」とあるが、日本の特色の現れ方を二つ二十字以内で抜き出し、始めと終わりの三字をそれぞれ書け。(句読点は不要)

問3 Xを補うのに最も適当なものを次から選べ。()

- アもし イおそらく ウそのうえ エだから

問4 傍線部3「日本人のおのずから自然観」とはどのような自然観か。適当なものを後の選択肢から一つ選べ。

- ア 災害の頻発による無常観に基づいたすべてのものをあがめ敬う自然観。
イ 災害によって祖先を失った経験に基づいた先祖崇拜の自然観。
ウ 災害に悩まされ続けた経験に基づいた制御の方法を考える自然観。
エ 災害の記憶を継承せずありのままに受け入れ割り切ろうとする自然観。
問5 本文の内容と合致するものを次から二つ選べ。() () () () ()
ア 集落に鎮守の社が建った結果、住民たちはそれぞれの土地に定住することになった。
イ 仏教が日本に土着したのは日本人の自然観と仏教的無常観の相性がよかったからである。
ウ 日本で科学の發達が遅れたのは、砂漠がなかったからである。
エ 日本は、現象の原因の探究よりも災害の軽減についての具体的方策を考える必要があった。
オ 日本は西洋に比べて科学的に遅れた劣った国である。

課題3

次は芥川龍之介『鼻』から抜粋した箇所である。人よりも長く、大きな鼻を持つ内供（禪智内供）は、長年この鼻のことで周囲から見下され、自尊心を傷つけられてきた。その鼻を治療する術を医者から伝授され、内供は鼻の治療に成功する。以下はその場面である。

鼻は——あのあごの下まで下っていた鼻は、ほとんど嘘のように萎縮して、今は僅かに上唇の上で意気地なく※1残喘を保っている。所々まだらに赤くなっているのは、恐らく踏まれた時の痕であろう。こうなれば、もう誰も笑うものはないにちがいない。——鏡の中にある内供の顔は、鏡の外にある内供の顔を見て、**X**そうに眼をしばたいた。

しかし、その日はまだ一日、鼻がまた長くなりはいないかと云う不安があった。そこで内供は誦経する時にも、食事をする時にも、暇さえあれば手を出して、そっと鼻の先にさわって見た。が、鼻は行儀よく唇の上に納まっているだけで、格別それより下へぶら下って来る景色もない。それから一晩寝てあくる日早く眼がさめると内供はまず、第一に、自分の鼻を撫でて見た。鼻は依然として短い。内供はそこで、幾年にもなく、法華経書写の功を積んだ時のような、**1**のびのびした気分になった。

所が二三日たつ中に、内供は、**2**意外な事実を発見した。それは折から、用事があって、池の尾の寺を訪れた侍が、前よりも一層おかしそうな顔をして、話もろくろくせず、じろじろ内供の鼻ばかり眺めていた事である。そののみならず、かつて、内供の鼻を粥の中へ落した事のある中童子などは、講堂の外で内供と行きちがった時に、始めは、下を向いておかしさをこらえていたが、とうとうこらえかねたと見えて、一度にふっと吹き出してしまった。用を云いつかつた下法師たちが、面と向っている間だけは、つつしんで聞いていても、内供が後ろさえ向けば、すぐにくすくす笑い出したのは、一度や二度の事ではない。

内供ははじめ、これを自分の顔がわりがしたせいだと解釈した。しかしどうもこの解釈だけでは十分に説明がつかないようである。——勿論、中童子や下法師が笑う原因は、そこにあるのにちがいない。けれども同じ笑うにしても、鼻の長かった昔とは、笑うのにどことなく様子がちがう。見慣れた長い鼻より、見慣れない短い鼻の方が滑稽に見えると言え、それまでである。が、そこにはまだ何かあるらしい。

——前にはあのように※2つけつけとは笑わなんだて。

内供は、誦しかけた経文をやめて、禿頭を傾けながら、時々こうつぶやく事があった。愛すべき内供は、そう云う時になると、必ずぼんやり、傍らにかけた普賢の画像を眺めながら、鼻の長かった四五日前の事を思い出して、「今はむげにいやしくなりさがれる人の、さかえたる昔をしのぶがごとく、ふさぎこんでしまうのである。——内供には、遺憾ながらこの問に答を与える明が欠けていた。

——人間の心には互に**Y**した二つの感情がある。勿論、誰でも他人の不幸に同情しない者はない。所がその人がその不幸を、どうにかして切りぬける事が出来ると、今度はこつちで何となく物足りないような心もちがする。少し誇張して云えば、もう一度その人を、同じ不幸におとし入れて見たような気にさえなる。そうしていつの間にか、消極的ではあるが、ある敵意をその人に対して抱くような事になる。——内供が、理由を知らないながらも、何となく不快に思ったのは、池の尾の僧俗の態度に、**3**この傍観者の利己主義をそれとなく感づいたからにほかならない。

(芥川龍之介『鼻』による)

※1 残り少ない命、余生。ここでは長く垂れ下がった鼻の勢いを失った様子。

※2 遠慮なく、あからさまに

問1 **X**を補うのに最も適当なものを次から選べ。

ア 不安 イ 気だる ウ 満足 エ 狡猾 オ 意外

問2 **Y**には、「つじつまが合わないこと」という意味の故事成語が入る。漢字二字で書け。() ()

問3 傍線部1「のびのびした気分になった」とあるが、内供がこのような気持ちになった理由として最も適当なものを次から選べ。() ()

ア 鼻が自分の思った通りの形になったから。 イ 法華経の写経がうまくいったから。
ウ 一日たつても鼻が短いままで安心したから。 エ 一日中鼻を触る必要がなくなったから。

問4 傍線部2「意外な事実」とは何か。次の空欄に当てはまる言葉を書け。() ()

鼻が短くなった現在の方が ()
傍線部3「この傍観者の利己主義」として最も適当なものを次から選べ。() ()
ア 他人の不幸に対してより不幸にしたいという人間の利己心。
イ 不幸を乗り越えたものを再びおとしめたいと思う人間の利己心。
ウ 人の道にそれてまで幸福になることを許せない人間の利己心。
エ 神から与えられた見た目を変えることをおとしめたい人間の利己心。

課題4

次の古文を読み、後の問に答えよ。

(注1) 豊前国の住人、太郎入道といふ者ありけり。(注2) 男なりける時、常に猿を射けり。ある日、山を過ぐるに、大猿ありければ、木に追ひのぼせて射たりけるほどに、Pあやまたず(注3)かせぎに射てけり。すでに木より落ちむとしけるが、何とやらむ物を木の股に置くやうにするを見れば、子猿なりけり。①おのが傷を負ひて(注4)土に落ちむとすれば、負ひたる子を助けむとて、木の股にすゑむとしけるなり。子猿はまた、母につきて離れじとしけ

り。②かくたびたびすれども、なほ子猿つきければ、もろともに地に落ちにけり。それよりながく、猿を射ることをばどどめてけり。

『古今著聞集』による

《語注》^(注1)豊前国…現在の福岡県と大分県の一部。^(注2)男…まだ出家していない、一般の(在俗の)男。

^(注3)かせぎ…木の股。木のY字に分かれた部分。

^(注4)土…地上。

問1 a「ける」の品詞として最も適当なものを次から選べ。() ()

ア 助詞 イ 助動詞 ウ 連体詞 エ 動詞 オ 形容動詞

問2 二重線部P「あやまず」のここでの意味として最も適当なものを次から選べ。() ()

ア 間違いなく イ 待たないで ウ 謝らないで エ 誤って

問3 傍線部①「おのが傷…助けむとて」の説明として適当なものを次から二つ選べ。() () () ()

ア 大猿を主語とする文章である。 イ 前半で否定した内容を後半でさらに否定している。

ウ 係り結びの法則が用いられている。 エ 「負ひて」の「負ひ」と「負ひたる」の「負ひ」とは意味が異なる。

オ 太郎入道に対する敬語が用いられている。

問4 傍線部②「かく」は「このように」という意味だが、どのようなことを指しているか。最も適当なものを次から選べ。() ()

ア 大猿が子猿を助けようと木の股に据え置こうとするが、子猿は大猿から離れようとしないうこと。

イ 大猿は負傷して地面に落ちそうになるが、子猿は大猿を助けようと木の股から離れずにいること。

ウ 子猿が大猿から離れようとしないうため、大猿と子猿は二匹とも地面に落ちてしまったこと。

エ 太郎入道が子猿を助けようと木の股に据え置こうとするが、子猿は大猿から離れようとしないうこと。

問5 本文の内容と合致しないものを次から一つ選べ。() ()

ア 太郎入道は、猿の親子の情愛に心打たれた。

イ 大猿は、子猿を何とか助けようとした。

ウ 子猿を射られた大猿は、子猿を逃がそうとした。

エ 太郎入道は、この出来事の後、長く猿を射ることをしなかった。

オ 大猿と子猿は、二匹とも地面に落ちてしまった。

課題5

漢文分野に関して、以下の問いに答えよ。

問1 書き下し文を参考に、後の白文に返り点と送り仮名をつけよ。

(1) 禍ひ転じて、福と為す。 転 禍 、 為 福 。

(2) 悠然として南山を見る。 悠 然 見 南 山 。

(3) 豹は死して皮を留め、人は死して名を留む。 豹 死 留 皮 、 人 死 留 名 。

(4) 項梁は籍に兵法を教ふ。 項 梁 教 籍 兵 法 。

問2 次の漢文を書き下し文に改めよ。

(1) 王 好^レム 戦^ヒラフ。() ()

(2) 管 仲^ハ 事^フニ 公 子 糾^ニ。() ()

(3) 有^レリ 朋、自^リ 遠 方^ニ 来^{タル}。() ()

(4) 無^レカレ 為^ニルコト 牛 後^ト。() ()

問3 次の漢詩について、下の問いに答えよ。なお「」内は書き下し文である。

千山鳥飛_フ絶_エ 「千山鳥飛ぶこと絶え」

(1) この漢詩の形式を漢字四字で答えよ。

万径人蹤_ス滅_ス 「万径人蹤滅す」

(2) 何句目と何句目が対句になっているか。

孤舟蓑_ノ翁_」 「孤舟蓑笠の翁」

(3) 韻を踏んでいる漢字をすべて抜き出せ。

独_リ釣_ル寒_{江ノ}雪_」 「独り釣る寒江の雪」

(4) この漢詩の主題として最も適当なものを選べ。()

ア 寂しさ イ 自尊心 ウ 劣等感 エ 勤勉 オ 親近感

(柳宗元『江雪』による)

《語注》 人蹤…人の足跡。 蓑…みの。 翁…老人。 寒江…寒い川。

【国語 解答解説】

課題1に正解はありません。しっかりと本を読んで、その本の魅力が伝わる文を書いて下さい。

課題2

〔正解〕問1 無常 問2 八百万くて来た、至るとくさせた 問3 ウ 問4 ア 問5 イ・エ

《解説》問2 日本の特色の一つは、傍線部「これも」とあるように直前の内容が答えになる。また、この直前の内容の始まりが、「また一方」であるために、「もう一方」の日本の特色として述べられる。「八百万の神」への信仰について言及した箇所を抜き出せばよい。

課題3

〔正解〕問1ウ 問2矛盾 問3イ 問4周囲が無遠慮に笑う 問5イ

《解説》問1 直前に「もう誰も笑うものはないにちがいない」とあること、また、前文より、周囲から鼻のことで傷つけられていた禅智内供の心情を読み取る。問4 「つけつけ」と笑う周囲の態度に注目して記述の解答を作成する必要がある。侍と中童子の反応にも注目したい。

課題4

〔正解〕問1イ 問2ア 問3ア・エ 問4ア 問5ウ

《解説》問1 品詞については、高校入学後すぐに古文分野の学習に必要となるので復習しておくこと。

問2 「あやまた」「+」「ず」と単語に分けた場合、「あやまた」の基本形は何かを考える。活用語尾が「た」なので、基本形は「あやまる」ではなく「あやまつ」であることを見抜く。現代語にも「過ち」という言葉があることから、「過つ」は「間違う・失敗する」意味であることを理解しよう。問3 ア…「傷を負ひて」「落ちむとすれば」「子を助けむ」の主語はいずれも「大猿」〓〓。イ…「む」は「否定(打消)」を意味する語ではない〓〓。ウ…「係り結び」に不可欠な係助詞「ぞ」なむ・や・かこそ」が傍線部には見当たらない〓〓。エ…「傷を負ひて」は「傷を受けて」の意、「子を負ひて」は「子を背負って」の意と意味が異なる〓〓。オ…傍線部に敬語は用いられていない。敬語を用いる必要のない部分でもある〓〓。問4 「かく」〓〓のように「は直前の」おのが傷を負ひて、離れじとしけり」を指すのでアが正解。しかも指示内容は「たびたび」したことなので、「たびたび」繰り返すことが現実的でないウは不可。イは「子猿は大猿を助けよう」としていないので×。子猿を助けようとしているのは太郎入道ではないのでエも不可。問5 「射られた」のは大猿であり子猿ではない。

課題5

〔正解〕

問1 (1) 転_レジテ禍_ヒ、為_レス福_ト。(2) 悠然_{トシテ}見_ニル 南 山_ヲ。(3) 豹_ハ死_{シテ}留_レメ皮_ヲ、人_ハ死_{シテ}留_レム名_ヲ。

(4) 項梁_ハ教_ニフ籍_ニ兵法_ヲ。

問2 (1) 王戦ひを好む。(2) 管仲は公子糾に事ぶ。(3) 朋有り、遠方より来たる。(4) 午後と為ること無かれ。

問3 (1) 五言絶句 (2) 一句目と二句目 (3) 絶・滅・雪 (4) ア

《解説》問2 (1) 「若し」(2) 「自り」(4) 「不」は助詞助動詞なので、ひらがなに直して書き下す。

問3 (1) (2) (3) は漢詩学習の基本。理解が不十分な点は復習しておこう。

問4 詩中の「絶」「滅」「孤」「独」に注目すれば、「寂しさ」が導き出せるだろう。